

学芸員の活動を市民に伝える

—大阪市立科学館の事例—

大阪市立科学館 学芸員 嘉数 次人

1. はじめに

大阪市立科学館（以下、科学館と呼ぶ）は、1989（平成元）年10月に開館した理工系博物館である。1937（昭和12）年に開館した大阪市立電気科学館（1989年5月閉館）の伝統を受け継ぎ、「宇宙とエネルギー」をテーマに掲げており、分野としては天文、物理、化学、気象、科学史などを扱っている。活動の柱は、プラネタリウムと常設展示場で、展示場では毎日サイエンスショーも実施している。そのほか、企画展、各種の教育・普及事業や調査研究、資料収集・保管など、各種の博物館活動を行っている。

科学館の学芸活動の中心を担うスタッフは、館長や学芸員を含めて13名在籍している。学芸員は研究職に位置付けられており、それぞれの専門分野を中心に、博物館施設が担う資料収集・保管、展示、調査研究、普及教育の活動全般を担当する。

日々の来館者へのサービス活動は、プラネタリウムと常設展示場（サイエンスショーを含む）の公開が二本柱で、特にプラネタリウムと常設展示場でのサイエンスショーは、来館者が学芸員を直接目にすることができ、またコミュニケーションが取れる機会と言える。実験教室やワークショップなどの普及事業も同様である。しかしながら、来館者すべてがスタッフとその活動を目にするわけではないし、加えて博物館活動を支える裏方的活動は基本的には目に触れることがない。であれば、ともすれば学芸員は「プラネタリウムやサイエンスショーをする人」程度に思われる可能性があると言える。

そんな中、大阪市立科学館でも、学芸スタッフの活動をより知ってもらうための活動を行っている。ここでは、それらの活動の中のいくつかの事例を紹介する。

2. 出版を通じて伝える

1) 『月刊うちゅう』

科学館では、広報用出版物の一つとして『月刊うちゅう』を発行している。これは、前身の大阪市立電気科学館時代に発足した「星の友の会」の機関誌として、1984年に創刊された。その活動は現在の科学館にも受け継がれ、40年以上も発行を続けている。

創刊時のコンセプトは、「居ながらにして科学館の活動に触れることができる雑誌」であり、

それは現在でも変わっていない。ここで言う科学館の活動とは、もちろん学芸スタッフが中心に行っている調査研究や教育普及活動等を意味しており、科学館で日頃行っている活動を誌上で展開することにより、来館できない人にも科学館を体験していただこうと意図している。従って、『月刊うちゅう』は、科学館の事業のお知らせを中心とする一般的な広報誌とは位置づけを異にしており、本誌の編集・発行・原稿執筆は、広報部門ではなく学芸部門が担当しているのが特徴である。



写真1：大阪市立科学館発行の『月刊うちゅう』。
1984年の発行以来、40年以上にわたって発行を続け、
2025年秋には通巻500号を超えた。

近年は全24ページ構成で、科学に関する内容を6ページかけてじっくり紹介するメイン記事を中心に、化学・物理・天文に関する記事、展示場や科学館所蔵資料の紹介記事、プラネタリウムやサイエンスショーの紹介、日々の活動の裏話をはじめ、バラエティーに富んだ内容となっている。また、一部の記事は外部の研究者等に執筆を依頼しているが、これもスタッフが紹介したいテーマを考えた上で、第一人者に依頼をするもので、いわば館内で行う講演会を誌上で実施しているとも言える。なお、科学館スタッフの記事は、全て記名式としており、読者からスタッフの顔が見えるようにしており、記事を通じて市民と科学館を結ぶことを心がけている。

2) 科学館ミニブック

科学館の刊行物の一つに「ミニブック」シリーズがある。これは、学芸スタッフの企画・編集により発行しているA5サイズの小冊子で、おおむね20～30ページ程度の「薄い本」である。科学館のミュージアムショップとオンラインショップで入手可能である。

内容は、科学館の企画展の図録をはじめ、学芸員の専門分野に関するワンテーマをまとめたものが中心で、書下ろしのほか、『月刊うちゅう』の記事をまとめたものもある。大半の冊子の



写真2：大阪市立科学館ミニブックシリーズ

価格は100～200円程度と、売り上げ利益はほとんど無い金額に設定し、気軽に読んでいただけるようにしているのが特徴である。企画展図録など一部を除いて、執筆に携わったスタッフを著者として明記しており、プラネタリウムやサイエンスショーなどでは見ることができない、専門家としてのスタッフの活動を伝えている。

3. 協働を通じて伝える

1) 中之島科学研究所コロキウム

科学館では、毎月第二木曜日の午後に「中之島科学研究所コロキウム」という事業を開催している。これは、科学館学芸スタッフと外来の研究協力者による、研究等の活動発表の場である。名称に冠されている「中之島科学研究所」は、1989年度から2018年度まで当館を運営していた大阪科学振興協会が2009年に設置した組織で、科学館の学芸スタッフと外来研究員で調査

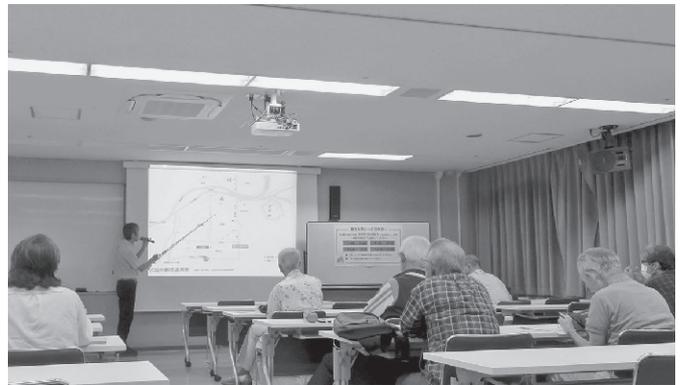


写真3：コロキウムの様子

研究活動とその普及を行うことを目的としていた。これは当時、科学館は学芸員制を取り、学芸員は研究職という位置づけであったものの、科研費を申請できる研究機関としては認められておらず、また日々の業務の中で研究活動が占める割合が低迷していたことから、活動を活性化させようという目的があった。また科学館の前身である大阪市立電気科学館では、市井の研究者と共同で研究活動を行う活動を1970年代後半から行っていた。中之島科学研究所はその精神を受け継いで、市民科学の振興も目的としていた。

設立当初の中之島科学研究所は財団内の一組織として位置付けられ、科学館の学芸スタッフが兼務として研究員を担った。加えて、外来の研究者数人を嘱託研究員（主に市井の研究者や定年退職された大学教員）として招いた。予算措置としては、科学館でもともと予算立てしていた研究費の一部を研究所の予算費目に移し、嘱託研究員も一定額が使えるように整えた。そうして行った活動の成果は、研究会や学会、科学館のコロキウム等での発表のほか、科学館の研究報告誌や学会等の論文誌において公表した。

その後、2019年4月に組織改編が行われ、科学館は地方独立行政法人大阪市博物館機構の運営となった。その際、中之島科学研究所は組織として存続できず廃止となった。その後は、学芸スタッフと旧嘱託研究員が、コロキウムでの発表や研究報告誌への投稿などを現在も継続して行っているが、組織としては存在しない。従って、コロキウムも現在は科学館の普及行事の一つという扱いになっている。しかしながら、科学館の学芸スタッフと外来研究者が

協働で、自らの活動を市民に伝える重要な機会の一つとして、現在に至るまで機能している。

2) ボランティアと協働で

科学館では、ボランティアスタッフの活動支援を行っている。ボランティアには、展示場での展示解説を担う「サイエンスガイド」、天体観望会で望遠鏡操作や天体解説などを担う「天体観望会指導員」、科学館のサイエンスショーや実験工作教室を担う「科学デモンストレーター」他があり、それぞれ活動している。

中でも、「科学デモンストレーター」は、約1年間の養成講座を受講し、修了したメンバーで構成されており、2024年度では14名が活動している。その中の一部メンバーは有志で活動の幅を広げたり、学芸スタッフと共同で得られた知見や考察を論文や報告としてまとめたりしている。これらは、施設のスタッフがボランティアを指導または支援するという、ステレオタイプの考え方から一歩踏み出しており、協働レベルの活動とすることができる。

4. SNS を通じて活動を伝える

科学館でも、SNSを用いて科学館の活動を広報している。そのうち、X（旧twitter）では、科学館広報に加え、館長と学芸員がそれぞれアカウントを開設し、それぞれが自らの活動を中心に、ホットな科学の話題などを直接語っている。ポスト（旧ツイート）は記名が原則である。加えて館の広報部門は、Xに加えインスタグラムも開設しており、日々の広報に加えて、学芸スタッフの日々の活動取材し、写真や動画、解説文ともに親しみやすい内容を発信している。

5. プラネタリウムやサイエンスショーの位置づけを伝える

科学館のプラネタリウム投影は1日7～8回、サイエンスショーは1日1～4回実施しており、学芸スタッフの活動の柱の一つとなっている。そのため、スタッフは日々の一定時間をプラネタリウムとサイエンスショーに時間を割いている。

それぞれの内容は、一般向けプラネタリウムはテーマ部分を3カ月ごとに更新し、またサイエンスショーは数種類の演目をアラカルトで実施している。プラネタリウムやサイエンスショーは、一見するとシナリオに沿って実施するだけのように思われがちであるが、そのプログラムは全てオリジナルで企画・作成しており、また実際の現場では来場者の様子を見ながらその場で内容を微調整する。話題になっている科学ニュースや天体現象などタイムリーな情報も取り入れる。もちろん、楽しみながら学べる雰囲気や、科学的に正しいことを伝える、実験の場合は安全性を考慮するといった基本的なことを行うのは前提である。そのため、制作と実施にはかなりの期間と労力、専門性を要する。そこで当館では、プラネタリウムは企画展の一

つとして位置付けており、また、サイエンスショーもそれに準じている。広報でも、プラネタリウムとサイエンスショーは、専門を持った学芸員が担当していること、オリジナルの内容であることを伝えるように心がけている。

なお、プラネタリウムでは、土日祝日の夕方に「学芸員スペシャル」という特別プログラムを実施しており、天文担当学芸員が、それぞれの個性・分野・時事に応じた投影解説や、おススメのコンテンツを紹介するなど、日頃の通常プログラムの枠内では伝えきれない話題を取り上げることで、より深い活動を展開している。

6. おわりに

以上、大阪市立科学館において、学芸活動をより広く伝えるために実践している事柄のごく一部を紹介した。

ここで紹介した活動の中には、全国の施設でも一般的に行っていることも含まれているものもあるが、館としての基本的な考えとして、①科学館には学芸員を中心とした専門家が在籍し、②専門知識を活用して、科学館を訪問した来館者だけでなく、広く科学と市民をつなぐための活動を行っている、という二つの点を柱にして、日々の活動を広く伝えている。

当館は「科学を楽しむ文化の振興」というコンセプトを掲げており、それに沿って、多くの人に科学を楽しんで学んでもらえるように、日々よりよい活動に取り組んでいきたい。